

おーい中村君①

“恩人”は何をする人ぞ

現存する姫路城は、池田輝政による築城から400年を越えていることは周知のとおりです。当然その間、城に破壊の危機が訪れたことも何度かありました。その最大の危機は、第2次世界大戦時の米軍による無差別爆撃でした。姫路市街は昭和20(1945)年に2度、B29による爆撃を受けたものの、運良く城は焼失せずに済みましたが、多くの一般市民が殺されました。

そして次に大きな危機は、江戸幕府崩壊と明治新政府樹立という政治的変革に伴う城郭の処遇です。姫路城もその大波に呑み込まれましたが、明治6(1873)年に存城となりました。しかし、天守をはじめとする建物は解体や売却が予定されていたところ、明治11年、中村重遠(しげとう)陸軍大佐による山縣有朋への保存上申によって、破却を免れたと言われています。この上申がなければ、姫路城大天守は解体されていたものと信じられており、中村重遠は姫路城を救った“恩人”とされて、昭和19年には彼の顕彰碑が建立されました(写真)。

この中村を“恩人”とする話の前段として巷間語られるのが、「23円50銭落札」のことです。大天守などが23円50銭で地元の商人神戸清一郎に払い下げられたものの、解体費用がかかるため権利を放棄したというものです。これを危惧した中村が姫路城の保存を上申するに至ったというのが、橋本政次の説くところです(橋本『姫路城史』下巻)。

「23円50銭落札」は、もともと昭和2年5月30日に清一郎の子清吉が「姫路城は神戸家の所有だ」と主張していると、読売新聞が紙面で煽ったことに始まる話です。ところが、6月1日付の神戸又新日報で清吉は、「明治七年頃に白鷺城を買い受け即日陸軍省に買い上げてもらった」ことは間違いのないと言っており、落札がたとえ事実だとしても、翌日には陸軍の手に戻っていることになり、実質的には神戸清一郎の所有になっていないことと同じです。また、陸軍省大日記には「姫路城内建物売却之儀ニ付更ニ伺」という史料があります。

姫路城内及旧番所等大破之ケ所監督検査済ニ付入札ヲ以御売却相成度旨本年五月六日伺出候処、同二十日陸第千二百十九号ヲ以伺之趣該城色分図面ヲ以建物存廢ヲ区分シ更ニ可伺出旨御指令ニ基キ則別紙図面調製建物存廢ヲ区分シ進呈仕候間御売却相成候様致度別紙予算書相副此段相伺候也

九年六月廿三日 工兵第四方面提理代理

陸軍少佐 飛鳥井雅古

陸軍卿 山縣有朋殿

陸軍の史料で見ると、姫路城内の建物の払い下げは、明治9年頃から本格的に進められようとしていたことが明らかです(残念ながら「該城色分図面」「別紙図面」は、防衛研究所図書館にはありませんでした)。清吉の言う明治7年というのは時間的に少し早いことになり、あるいは三の丸の御殿群のことかもしれません(

明治8年に三の丸造成の入札の告知が飾磨県から布達されている)。どうも読売新聞による誘導の臭いがします(『姫路市史』第14巻では、「23円50銭落札」を否定しています)。となると、橋本政次の記した「23円50銭落札」から中村の上申へと至る姫路城保存の流れは再考の余地があります。

中村が本当に“恩人”だったのかどうかについては、すでに森山英一氏が検討されています(姫路城を守る会『白鷺城』第30号、2000年)。それによると、姫路城を救った“恩人”として中村が顕彰されたのは、軍人礼賛の風潮の中、厳しくなった戦局下で戦意と国防意識を高揚させるためだと考えられるというのです。

ところで中村は、土佐宿毛の伊賀家中の出身で、新政府軍として戊辰戦争に従軍しました。土佐藩出身者には明治政府の要路となるものも少なくなかったのですが、彼はそうなりません。

私共儀

宇都宮及高崎兵營新築之場所為見分去月三十一日発程之処水戸表枝軍仮營所破壊之場所不少至急其筋ニオイテ見分相成候様右出張向ヨリ掛合相成候折柄幸ヒ今度出張ニ付而ハ是非実地見分先々所置いたし兵候様宇都宮營所新井陸軍少佐申聞候ニ付同所へ罷越右御用相済昨二日歸京仕候、此段御届申上候也

明治六年八月三日 陸軍中尉 石川家直

陸軍中佐 中村重遠

山県陸軍卿様

これは中村が当時、どんな役回りだったかを垣間見ることのできる史料です。彼は明治6年7月21日から8月2日まで、高崎や宇都宮の営所新築現場を視察するため出張していたのです。上の史料は、その最中に水戸



菱の門内にある中村大佐顕彰碑

の仮営所の損傷が激しいことを知り、ちょうど北関東を巡回していたのでその足で水戸まで行き、現場を確認してきたと出張報告をしているものです。さらにこの10日後には、仙台・青森・函館への出張を中村に命じてよいか、との伺書が出されていますので、徴兵令布告に伴う鎮台の諸施設の拡充や修理のため現場を巡回していたことが察せられます。つまり、彼の任務は前線で兵士を指揮して戦うことより、兵士を支える諸施設等を差配することだったのです。武官というよりは文官、あるいは技官という立場になるのでしょうか。そうみると、西南戦争で自分の判断ミスから部隊に大損害を与えた(前掲『白鷺城』)というのも無理からぬところです。

中村が明治11年に姫路城保存の上申を提出したのは、彼のこうした経歴に関係するのでしょうか。換言すれば、この上申を作成・提出するのは中村の他にはいないと、省内では認識されていたのかもしれませんが。橋本政次が、彼の「才幹は戦争とは別のところにあつたのであろう」と述べたのは(前掲『白鷺城』)、正鵠を射たものと言えるでしょう。